

ギムとボールの世界に挑戦!

『ガンダムビルドダイバーズ』  
 公式外伝  
 公転開始!!

GUUNDAM BUILD DIVERS  
 GIMM & BALL'S  
 WORLD CHALLENGE

Episode 0-A  
 Fight for your right (to party)  
 ~心の準備はいいかい?~

↑RX-78-2から放たれたビームが、うかつに接近したふたりの間を引き裂くように通過していったのだった——。

Fight for your right  
 (to party)  
 ~心の準備はいいかい?~

ニッパ「ランナーD、タグ9、ライトアームパーツ、ゲートにニッパ……入れます」

つぶやくような彼のコールがマイクに拾われ響きわたる。パイプ椅子を二〇〇も並べれば満杯になる、配管剥き出しコンクリート打ちっ放しの会場には、決勝ということもあって、大勢の立ち見ができていた。彼がファースト・ニッパを宣告した瞬間、試合開始を待ちわびた歓声が熱気となって、息苦しいほどの高揚がヒリヒリと会場全体を奮わせた。ステージ上に掲げられたカウントダウンタイマーが、一時間の猶予を刻々と削りはじめる。

その目は、堅く閉じられている。  
 必要なパーツを丁寧なニッパ・ハンドリングでランナーからパージしたのち、彼は慣れた様子でゲート処理をコールした。

「ヤスリ、四〇〇……八〇〇……二〇〇……コンハウンド」

小気味よいコールにギャラリイが聞き入る。すべてのゲート跡を処理し、仕上げを確認したあと、彼は塗装前の仮組みに入った。

「これよりタポ処理を宣言。タポA17、ニッパ1半カット。ページ1の2ポディ内部パーツダボ穴、デザインナイフ、拡張——」

パーツ・オープナーをコールするという手もあったが、手間をかけた方がジャッジの印象がいい。仮組みのあとパーツをスムーズに分解するための、永遠とも思えるタポ処理ののち、先に組んでおくべきパーツを宣言する。

「タポC5、タポ穴C6、エンゲージ。続けて合わせ目消しを宣言、スチロール・セメント、乾燥確認。ヤスリ……コンハウンド」

カウントダウンの表示が三〇分をきった。歓声は、いつしか静寂という音にかわっていた、なのに熱気は逆に密度を増している。

彼は塗装の開始を宣言、塗装環境のコールをはじめていた。筆、エアブラシ、塗料など、各種塗装ツールの中、あえてコールしなかったものがある。塗装ブースと換気。

サーフェイスにはじまり、塗料の希釈・調合、塗装、そして仕上げのコーティングを宣言した時には、もはや会場にいる全員が、無意識に口元を手やハンカチで押さえていた。塗料や溶剤の臭いなどするはずもないのに。

彼は、勝利を確信した。  
 「RB・79戦闘ポッド、完成を宣言します」

見事な出来映えだった。全員が確かにそのガンブラを自身の目で目撃した……気がした。

「第八回エア・ガンブラ世界選手権 優勝は、アズマ・カール・トンソン！」

それは、空想の中で実物と寸分違わぬガンブラを、想像力の限りを尽くし精巧に組み立て完成させる、イマジネーション・ガンブラビルド——喝采の中、受け取った賞品のガンブラ『MGポール』は、幼い頃から警沢を許されず、高校三年になる今日まで、ひたすら空想の中でガンブラを組み立ててきた彼が、生まれてはじめて手にした、本物のガンブラだった。

※

ティム・バレットが、両親との地中海クルーズ旅行を断った理由は、高校三年にもなって恥ずかしかったからでも、父親の再婚相手——つまり新しい母親が、自分のひとつ年上でしかなかったことに対する抗議行動でもなく、単に父親の書斎に忍び込む



絶好のチャンスを逃したくなかったからだだった。あの部屋のどこかに、父親の宝物が隠してあるらしい。

父親にとっての宝とはいえ、オンラインでは入手困難な最上級にムフフなデータに決まっている、間違いない。

執務室のドアは、三重のシリンドラーキーにはじまる幾多幾種もの施錠によって厳重に守られていた。しかも室内では、各種センサーが警戒の目をキラキラさせている。

ところが、それらすべてを解錠できるマスター・パスの授かり手が、世にひとりだけ存在した。タイムが物心つく前から屋敷の世話をしている、お手伝いのミス・トレイシーだ。

「ねえトレイシー、父さんたちが旅行中にオレ、親孝行してびっくりさせたくて、父さんの部屋、掃除しようとか思うんだけど」

彼女は涙しながら、インボッシブルなミッシヨンの主人公すら潜入を躊躇するにちがいない扉を、ためらいなく開け放った。

ちよるいものだ。

しかし、肝心のブーツはどこにあるのか。

思索するタイムにトレイシーは、部屋からの去り際、ひとつだけ、きつい忠告を与えた。

「机の引き出しの、上から三番目だけは、決して開けてはなりませんよ、絶対に……」

上から三番目か。彼女が去ったのち、タイムはただちにそれを開けてみた。しかし、入っていたのは例のブーツではなく――

「……『MGジム・ドミナンス』？」

このガンブラの箱の中に隠してあるのか！ いきり立つモノを押さえつつ開けてみれば、中には二〇枚を越えるランナーと精巧なデカール、そして、

「この薄いの、そのブーツか！」

いいや、それは、トリセツだ。

「……ひょっとして、こいつ組み立てたら、最上級のヤバイ奴が出来上がるのかも！」

ガンブラ作りは初体験だった。それでもトリセツと首つ引きになつて完成させたそれは、けつしてヤバイアレではなかったが、

「……んだよ、スッゲーカッコいいじゃん！」

やらシユンと悲しげにうなだれた。

「僕には妹が六人もいてね、母親を助けるためにも幼い頃から贅沢する余裕なんてなくて……実はこのボールが、生まれて初めて手にした、本物のガンブラ……」

「そつなんだ……」

安全距離をキープしていたアテナントが、母性本能に背を押され、身を寄せた。

「……にしちゃ、イケてるだろ？ 初体験でこれほどのガンブラ、誰にも作れないと思わない？ それも、何万回ってエアでガンブラをつくってきたおかげ。ううん、ガンブラだけじゃない、僕はなんだってエア経験してる。エア・ショッピングにエア・グルメ、エア・海外旅行じゃ世界一周に何度も、そして……エア・デートだって！」

彼女の心の警報が再び鳴り出す。

「どうだい一緒に！ 青空の下でエア・ドライブをエア・エンジョイしたあとは、エア・三つ星レストランでエア・最高級ディナー！ エア・ホワインでエア・ほろ酔いになったらエア・ホテルのエア・最上階スイートにエア・チェックインして二人で眺める夜のエア・スカイライン！」

「なんなんだよ、おまえは」

カウンターの並びから事の成り行きを見守っていたタイムが、思わず声を掛ける。

「……………、そつこそ、なに？」

カールは一転、興味のなさを隠さず返した。

「彼女、思いつき怖がつてんじゃん」

見ればカウンターの下で、前下りのショートボブが震えている。

「君がいざなり僕らの邪魔するせいでよ」

「んははずねーし」

思わずタイムは、一歩歩み出した。

「ここはGBNだぜ」声を荒げる。

「ナンバの場所かなんかと勘違いしてんじゃねえか？」これもタイムである。

「お前が言うな」ゆるふわフロントである。

はじめて完成させたガンブラにうつとり見とれていたタイムは、ふと「そついや、ガッコーで……」と思いついた。

「誰だったか言つたな、ガンブラ持ったメンツが超集合してレッツ・パーティーするハコがあるって、確か………：そう！ GBN！」

「いいじゃないじゃん！ オレの自慢のドミナンスで、一緒にガンブラ・パーティーナイト、エンジョイしちゃえばいいじゃん！」

ジム・ドミナンスを得意げに見せつけつつこいつタイムを相手に、彼女は「じゃあ……」と、口紅艶やかな口もとを微笑ませ、

「早く入会手続きすませてくれる？ そつしたら、私なんかよりもっと素敵なダイバーたちと、思う存分パーティーナイトできるから」

GBN入会カウンターの美人アテナントはあしらいも手慣れたものだ。

ベイサイド・タウンにある巨大なガンダムベースは、今日も大勢のガンブラファンたちでにぎわっている。お目当てのゾーンをめざす人の流れを尻目に、タイムは、GBNエントリーゾーンにて入会の説明するゆるふわフロントを「そんなことより」と、スニードに誘おうとして――ふと、カウンターの並びから聞こえる声に耳を向けた。

「ひとこみが得意じゃないんだ……男らしくないよね、GBNに入会するだけなのにオドオドして……世界チャンプのクセに……」

伏し目がちに告白するカールは、目前の受付アテナントが「チャンピオンさんですか？」と尋ねたとたん、瞳の奥を輝かせた。

「そつ、エア・ガンブラ・バトルの！」

危険を感じたアテナントが身を引き、前下りのショートボブが大きく揺れる。

「知らない？ イマジネーションの宇宙でガンブラを組みたてる、ピュア&スティックなガンブラビルド・バトル！ このボールはその優勝賞品なんだ」

言いつつカールは、デイスカウント・バイのレジ袋から、ウエボン・カスタムめいっばいのボールを取り出し掲げ見せると――なに

「つーか、生まれてはじめて作ったガンブラだったら、オレの方が全然イケてんですケド」

彼が自慢げに掲げ見せたジム・ドミナンスを暫し冷ややかに見据えたカールは、

「それ、腕のパーツ、組み立て方間違ってる」

「適当言うなよ！」

「僕のこの頭の中にはMGスケールガンブラのエア・トリセツ、全部入ってるから」

それは驚沢できなかった彼が、せめてもと、ネットで手に入れたトリセツ画像を、ディスプレイが焼きつくほどに読み返した執着の賜物。

「だ、だからって、んな、ダウンタウンのホビーショップの『ご自由にお持ち帰りください』的なジャンクパーツくつつけたみてーなガンブラに負けるはずねえだろ！」

「くつつけた、みたいな……？ カールの目の色が変わった」

「『みたいな』じゃない！ 本当にくつつけたんだ！」

こうして勃発した二人の『どっちの初体験ガンブラがよりイケてるかバトル』の間にいきなり、「だったら」とゆるふわフロントが割り込んできた。

「勝敗は、GBNにロクインしたあと、ガンブラバトルで決めるつてのはどつ？」

「ええ！ 私もそれがいいかとー」

カウンターの下に身を隠していた彼女が立ち上がり、入会手続き用のシステム端末を急ぎ操作する。その表情が願っている――どうでもいいから、早くここから消えてくれ。

「は？ え？ いや、あの……」戸惑うタイムとカールがロクイン・ブースに押し込められ、二人のガンブラがダイバーギアでスキャンされる。抗うことを思いつくより一瞬先に、入会手続き完了のボタンが押された。

「Have a nice GBN！」

タイムとカールを見送る彼女たちのスマイルは、ヘッドギアの先に広がる無限の世界にて、これから彼らを迎えることとなる運命など、カケラも想像していなかった。

\*



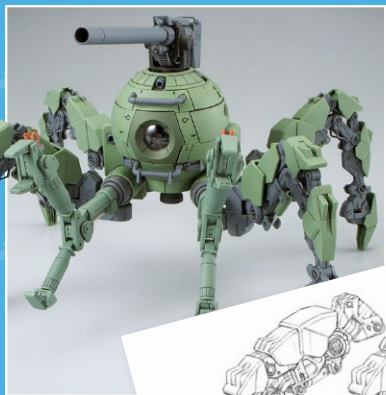
# Episode 0-A

Fight for your right (to party)  
～心の準備はいいかい？～

賞金と共に受け取った「ボール」は、生まれてはじめてカールが手にした本物のガンブラであった。







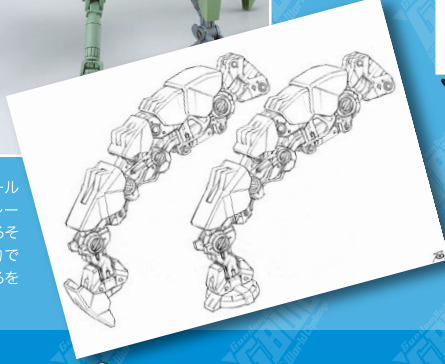
●ボールからはじまったガンブラ製作であったが、カールはその後ボール製作にこだわりつづけた。そして完成したのが、4本脚を備えた「ポリポッドボール」である。



RB-79  
ボール

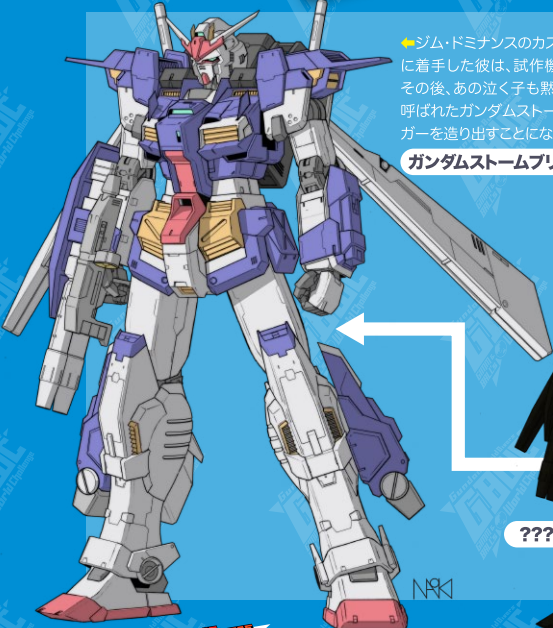


「第87回エア・ガンブラ世界選手権」で優勝を獲ったアズマ・カール・トンプソンが、副賞としてもらった支援ポッド。妄想の中だけでガンブラを組み立て続けていた少年が、はじめて手にした機体は自身のミドルネームと顔を踏んでいた。これぞ運命と言わずして何というのか(大きさ)。



●ポリポッドボールの脚部。内部フレームが露出しているその姿——官能的であると言わざるを得ない。

←一年後……

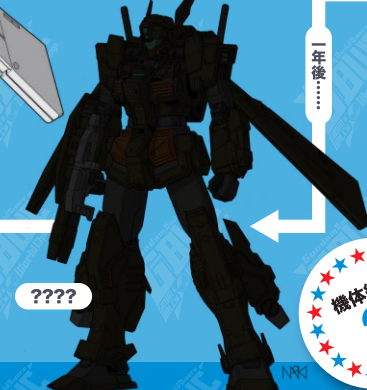


RGM-79D0  
ジム・ドミナンス

●ジム・ドミナンスのカスタマイズに着手した彼は、試作機を製作。その後、あの泣く子も黙る名機と呼ばれたガンダムストームプリンガーを造り出すことになる——。

ガンダムストームプリンガー

ティム・バレットが、父の部屋にある机の引き出しを空けたところ、姿を現したガンブラ。ムフフな気持ちを抱いていた彼にとっては肩すかしてあったが、何か運命を感じたのである。



????

←一年後……

あれからどれだけの時が経ったのだろうか。広漠たるそのタイムゾーンに時間の制限はなく、銀河の片隅の星屑の中で眼下に青い惑星を見下ろしながら、二人は幾度となく刃を交わし、それでも勝ち負けはさだまらず——既に気力は限界をとうに越えていた。

「……いいかげん、負けを認めれば、楽になるぞ……」 ティムが願う様にうなずく。

「……こっちのセリフ……」 カールはそれだけをしぼり出すのが精一杯だった。

そう、たったひとこと、君のガンブラの方がイケている、そう告げてしまえば楽になれる、わかっているさ、わかっているとも……けれど、それを言ってしまうのは、こうして共に戦っている……奴に対して失礼だ。

気づけばティムが笑っている。

カールも微笑んでいる。

ああ、なんて気持ちのいい瞬間なんだろう。

——そして、その時は、突然訪れた。

ジム・ドミナンスを突如、一閃のビームが貫いた。

放ったのはボールではなかった。

見向けばそこに、一体のガンダム。

「あれ……MG THE ORIGINAL RX-78-2!」

カールが思わず咬んだ次の瞬間、彼のボールも謎のガンダムの餌食となった。

瀕死のジム・ドミナンスのcockピットで啞然としていたティムが、ようやく口を開く。

「オレらを一撃で……悪魔みてえな強さだ……」

「まさに、我こそがGBNの深淵を支配し闇を司る者、全知全能の墮天使……琉依XIII醒」

静かな声色が、二人のcockピットに届いた。

「ルイ、じゅうさんせい……だどー?」

九死に一生のボールのcockピットで、カールがまさかと声を漏らす。

「ひょっとして……おまえは……」

ティムは残る力の限りを振り絞り、言った。

「中学生だな!」

「永遠に感じる一瞬の間。」

「……ど、どうして!」

「ネーミングセンスの香ばしさ。中二?」

「ち、違う! 我はサタンの正当なる末裔にして闇の光の支配者ルシフェルの——」

「じゃ、僕が出す微分積分解いてみるよ」 カールが追い打ちをかける。

「そんなのまだ授業でやってないし!」

「やっぱ中学生じゃん」

「わ、我はこれから塾であるからログアウトする」

逃げ去るかぐわしいガンダムを、しかし二人はもはや追う気力を持ち合わせていなかった。

「……中学生だってさ……ジム」

やれやれとボールが言う。

「……誰がジムだよ。それって、オレのガンブラの名前なんだけど」

「だってログイン名、ジムになってる」

「はあ?」と会話ログを見れば、確かにティムのタイパーネームは「ジム」に、そして、カールの方は「ボール」に。

「そっか、彼女たち、ガンブラの名前で僕らのログイン手続きしちやっただ」

「しかもオレの方、綴り違ってんじゃん、GMじゃなくてGIMMって……」

「偶然……それ、昔の、リアルタイプの時の表記だ……」

「へえ……」

しかしもはや、そんなことどうだっていい。

「中坊に潰されるなんて、ざまあないな」

「いまの僕たちのガンブラの腕は……中学生以下ってことか……」

じつと遠くを見つめる二人の顔を、月に隠れていた陽が顔を出し、照らしはじめた。二つの口元が同時にニヤリと笑む。

心の中で、ジムとボールの拳が、コツンと突き合わさった。

「へっ」



ティム (ログイン名:ジム)

カール (ログイン名:ボール)

こっぴどく痛めつけられたふたりは一年後、大きな成長を遂げる!!

オレの自慢のドミナンスで、一緒にガンブラ・パーリナイトエンジョイしちゃえばいいじゃん!

